狐付き

シンシンノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
狐付き

【Ｎコード】
Ｎ１６６０ＢＡ

【作者名】
シンシンノ

【あらすじ】
狐に妙に敬われる主人公　白崎誠也は山で狐の嫁入りを目撃して異世界へ連れていかれる。
セーヤを主様と呼び連れ去った美しき妖狐に見守られながら修行や冒険者を通してセーヤの隠されたの力が覚醒していく。

※処女作となります。気が向いたら生温かく見ていただけると嬉しいです。

※1話1話が短いです。

プロローグ

「あ・・さ・ある・さま」
どこからはっきりとしない声が聞こえる・・・
声のする方を見るがが、もやがかかってるようにぼんやりとしたシルエットだけが目に入る。
「ある・・さまいつ・でもわたく・は主様をお待ち続けていま・・・」
「主様がお戻りになられる日を・・・」
徐々にはっきりしていく声。どことなく懐かしいく美しい声を聞いて『あぁ…またか・・・』と思ってる間に闇に意識を飲みこまれていく。
「主様が力を御戻しになられましたそのときには・・・」
最後の声は深い眠りの底へいざなわれている俺には聞こえていなかった。
「御迎えにあがります。あと少しあと少しお待ちくださいませ。」
ぼやけたシルエット、そのシルエットの頭の上にある2つのでっぱりと腰のあたりから出たボリュームのある3本のなにかが幻想的に揺れていた。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――

寝坊

『ピーピー』

「ん・・・ん〜〜・・・」

不快な電子音が頭を揺さぶる・・・頭がボーっとしてる中音のする方に無意識的に手を伸ばす。

カッチャと音がして不快な音が消える。

「ん・・・これでゆっくり・・・」

再度心地よい世界へと旅立っていく。

不快な電子音を立てていた時計は午前7：00を指していた。

「ん〜〜〜ゆっくり寝たぁ〜」

清々しい朝だ。なんだかいつもより清々しい。「ん〜」と背伸びをして体を伸ばす。

「しかしたまに見るあの夢はなんなんだろうなぁ？いやな感じはしないけど〜」

とそんなことを考えていると不意にあるものが目に入る。

「！？！？」

あれ？なんで時計の短針が9の所にあるんだろう？

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－
－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－
－－－

「いつもなら学生やリーマンでごった返してるのに人が少なくて快適♪快適♪」

起きて寝坊したことに気付いてからの俺の行動は早かった。
まず携帯で学校に連絡して、
「あ・・・すいません…ゴッホ・・・朝から熱が出て・・・ちょっと病院に行くため今日は休みます。」
うん完璧。電話にでた担当の先生も
「白崎。無理するなよ！ゆっくり休んでしっかり治せ」
と言ってくれた。日頃から真面目な態度で授業を受けていた事が功を奏して全く疑われなかったぜ。（と言ってもまだ１６歳で高校生歴半年くらいだが・・・）
学校では一応真面目に分類されるはずだ。成績は学年でトップクラス。運動神経もよく先生方からの評判も悪くはない。いやむしろいい方だと思う。
そんな俺こと『白崎誠也』がなぜ『完全に』真面目ではなく『一応』真面目だと思われているかというと顔のせいだ。とはいっても顔が悪いということではなく、むしろ色白で整っていると言えるだろう。
（若干目つきは悪いが）
問題は髪だ…髪の色が・・・生まれつき金色なのである。なんでも髪の色素が普通と違うらしい。
理由は不明なんだが・・・将来禿げたりしないよね？大丈夫だよね？
目つきの悪さと金髪のせいでぱっと見ヤンキーにしか見えない。でも話せばそんなことないと皆わかってくれる。話せばだけど…
学校では教師はまぁ『見た目はあれだが、中身は真面目』と思ってくれているようだが、同級生からは怖がられる。っというか避けられる。
小耳にはさんだ話の一部を抜粋するとだと・・・
『白崎さぁなんか鬼島先輩を返り打ちにしたらしいぜ？』
『え？鬼島先輩ってあの『三校の鬼』って呼ばれてる鬼島先輩？』
『そうその鬼島先輩。なんでも鬼島先輩が白崎の髪と目つきが気に入らなかったらしくて校舎裏に呼び出したらしいんだが、その後鬼

島先輩が帰ってこないから様子を見に行った先輩が一人で倒れてる先輩を見つけたらしい。』
『マジかよ！？白崎さんマジパネェｗ俺はあの眼を見たときから３人は殺してると思っていたね』
『マジで関わらないようがいいよなぁ～』
『だな。生徒指導の鈴木もビビって白崎にはなんもいわねぇらしいからなｗｗ』

っとこんな感じ。いや鬼島先輩は・・・ただ単にいちゃもんつけられたから、論破したら殴りかかってきたのを避けたら自分で壁に激突してそのまま失神しちゃっただけなんだが・・・
ちなみになぜ俺がその場にいなかったかというと人を呼びに行こうとしたらすれ違った人が失神してる鬼島先輩を見つけて騒ぎになったから逃げた。

だって・・・なんか怖いじゃん？

鈴木先生の話だって・・・別に俺が悪いことしてないのはわかってくれてるから何も言われねぇだけだし・・・髪の事は医者からの診断書を提出してるしよ。

まぁ話がなんか長くなったがつまりは俺は学校では避けられていて、友達がいないということだ…クソ・・・リア充爆発しろ。
ちなみに家族もいない。っというか…もういない。
俺は幼いころじぃちゃんに預けられてじぃちゃんが育ててくれたんだが、そのじいちゃんも今年の夏に他界してしまった。両親は死んだとじいちゃんから聞いていただんだが、
死ぬ寸前に、
「おまえは本当は家の前に捨てられていたんじゃ。だからワシが育てた。」

とそんなことを言われた。えーーーっと法律的にそれはどうなんだろう？ありなんだろうか？まぁじぃちゃんのことだからどうにかしたんだろう。
現に俺はじいちゃんに育てられたし。

友達もいないし、家族もいないつまりは天涯孤独になってしまったんだなと思うと涙が出てきた・・・

っとそんなブルーな気持ちになって落ち込んでいるとアナウンスが聞こえてきた。
「次の停車駅は自然公園～自然公園～お降りの方はボタンにてお知らせください」
そういえばバスに乗ってあるとこに向かってるんだった。気分を変えるために強めに停車ボタンを押す。
『バッッチーン』強く押しすぎたせいで大きな音が鳴ってしまった。
周りの目が痛い。おばちゃんそんなクズを見るような眼で僕を見ないで…

寝坊（後書き）

ん・・・1話どのくらいにしたらいいのかがわからない・・・

動物自然公園

「ん～やっぱりここはいいなぁ～。癒されるぅ～～」
「やべやっぱりライオンは迫力あるなぁ」
「マジこの犬天使じゃねぇ？このもふもふ具合連れて帰りてぇぇぇ」
「ちょwあの猿さかりすぎじゃねどんだけヤレば気が済むんだよ。」

もうお分かりかと思うが寝坊して仮病を使い学校休んだ俺がどこにいるかといえば、山の中にある『自然動物公園』である。「自然動物公園」動物がいっぱいる！！

まぁつまりは動物園です。はい。

動物が大好きで大好きでしょうがない俺は月1くらいでここに訪れる。本当はペットを飼いたかったんだけど・・・じぃちゃんが動物嫌いで飼えなかったんだよなぁ…
じぃちゃんが死んだ後も自分の事で精一杯だから買うことは諦めてる。
ライオン・犬・猫・象・猿などさまざまな動物を鑑賞しテンショウが上がった俺はいつもなら近づかないエリアに足を踏み込んでしまった。
そのエリアは…

≪キツネ≫

エリアである。キツネは嫌いだから近づかない。なんてことはなくむしろ好きだ。あの綺麗な瞳・りりしい輪郭・とんがってピーンと

立ててる狐耳・そしてなによりあのボリュームのある尻尾をももふもふしたいと思わないわけないだろ？
それなのになんで近づかないかといえば…この状況を見てもらえればわかる思う。

「なぁお前たち。何がしたいの？」
俺が問いかけたのは、柵の向こうで大人しく座っているキツネ君たち。座っているだけならまだいい・・・なぜか俺の前に集まってきっちり自衛隊よろしく並んでいるんだぜ？
しかもみんな頭を下げている。意味がわからないだろ？
今日は平日っということもあり空いてるからまだいいが・・・前休日で人が多くいるときに同じ状況になった時は焦ったね。
その場を速攻で逃げたもん。
その後『自然動物公園に現れるキツネを従える謎の男』という新しい7不思議のひとつが出来上がってというのは別の話。
問いかけをしたがさすがに返事はない。返事があっても困るが・・・
俺はこれ以上7不思議に尾ひれをつけさせないためにさっさとその場を後にした。
後ろから「ワワワワーーン」という大合唱が聞こえてきた。お前たち知ってたか？キツネは「コーンコーン」なんて本当は鳴かないんだぜ？

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーー

狐の嫁入り

「ん～こんだけ天気がいいと昼寝日和だねぇ」
『自然動物公園』を後にした俺は山の遊歩道を散策して山の緩やかな斜面に寝っ転がり昼寝を楽しんでいた。今日は秋なのにぽかぽかして暖かい。ついうとうとしてしまう。

「ん・・・寝ちゃってたか・・・」
目を覚ましあたりを見回す。空は青から赤に変化していた。
「もう夕方かよ…早く帰らないとな。」
起き上がり服に付いた汚れをたたき落としていると不意に
「！？」
『ピッチャピチャ』
「雨かよ・・・空に雲なんてねぇのによ・・・天気雨ってやつか？」
そうぼやくと俺は走り出した。

「クソ・・・雨がどんどん強くなって行きやがる・・・」
どんどん強くなっていく雨。視界も悪くなっていく。そんな中どこからか…人が歩く音が聞こえてきた。
「え？こんな山の中で人の歩く音？後ろからか？しかもこの音の感じだと少人数じゃなくてだいぶ多くね？」
雨の中でも聞こえてくる歩く音。気になって誠也は振り向くと
「えぇぇぇぇ！！！？？？？」
・・・なんだあれ？普通じゃねぇだろ？俺はまだ夢でもみてるのか？
そこには行列が・・・しかも普通の行列ではなく１００匹を超すキツネの行列中盤には時代劇で見るような「籠」を担ぐキツネまでい

る。
言葉を失い、訳がわからない状態の誠也。そんな中、籠の窓？から
こちらを見る視線を感じる。
そちらをみると白無垢姿の一人の少女と目が合う。
（白無垢かぁ～結婚するのかなぁ？綺麗な人だなぁ…いや綺麗とい
うか可憐だぁ…っと俺はなにを考えて！？逃げなきゃ！！さすがに
これはふつうじゃねぇ・・・あれ？おかしい・・・）
誠也は逃げようとするが体が動かない。動かないというか…その女
性から目が話せない。
（え？なんで？どうして？俺なにが起きたの？）
ふとその少女がにっこりと笑う。
（あぁすごく可愛い。そしてなんだか懐かしい・・・体がふわふわ
してきた…なんだろうこの暖かさ・・・なんか眠くなって…）

誠也がそんなことを思っていると再度少女が笑い
「うふふ」
先ほどと同じく可憐にそして先ほどど違い妖艶に笑うと少女の唇が
動いた。

「お迎えにあがりました。主様。」

誠也は意識を失った。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

—
—
—

狐の嫁入り（後書き）

次からついに異世界です。

1話が短いな・・・次からもう少し延ばすようにした方がいいのかな・・・？

全然方向性もまだ決まっておりませんが、よろしければ生温かい感想をいただければと思います。

よろしくお願いいたします。

混乱そして会合

目が覚めるとそこは・・・和室でした。

「え…えぇっと・・・どこここ？」

全く見覚えのない部屋。布団から上半身だけ起き上がらせながら誠也はあたりを見回す。

（おぉ～あの掛け軸高そうじゃね？）

（あの壺なんだよ！？明らかに素人の俺でもわかる高級感漂ってんじゃん！？）

（どれか一個もらってもいいかな？貰えれば1カ月の食費には困らないんじゃね？わからないけどきっと）

（この布団ももふもふしててすげぇきもちいい。おやすみなさい。）

「っと現実逃避してもしょうがないよな・・・えっと何で俺はここにいるんだろ？」

寝起きで働かない頭を回転させて記憶を蘇らせる。

「昨日は・・・朝寝坊して・・・バスに乗って…自然動物園に行って・・・山で昼寝して・・・」

ここまではまぁいいだろ。問題はその後

「夕方昼寝から起きたら、狐の行列を見かけ籠の中にいる可憐な少女と目があったらここにいた・・・」

ハイ…完全にＯＵＴです。おかしいです。

少女と目があって気を失ったというのはまだいいだろ…

狐もまぁまだいいとしよう。

山だし狐がいてもおかしくはないんじゃね？あの山に狐がいるって話しは聞いたことないが・・・

きっと地球温暖化のせいで生態系とかがおかしくなってるんだろう。

きっとそう。

後問題はその狐が行列を作って白無垢の少女を運んでたことだよな・・・

なんか納得できる理由があるはずだ・・・

(頑張れ!俺の頭!!!頭をフルに働かせて納得できる理由を思いつかせるんだ!!!)

・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・・・

・・・・・・・

・・・・・・無理でした。

(納得できる理由なんてあるわけねぇじゃん!?だって狐だよ!?行列だよ!?美少女だよ!?)

「あっ!?」

ふ・・・ひらめいたね!さすが俺。

「きっと夢だ!!!きっと山で寝た俺が夢を見てそのまま寝ちゃってた俺をたぶんどっかの優しい人が家まで運んで看病してくれたんじゃね?」

多分これで間違いないだろ?ほかの可能性なんてあるはずがない。

狐も行列も美少女もきっと夢だ。美少女が夢なのは悲しいがそれはしょうがないだろ。

そう納得しかけた誠也の頭にいやもう一ついやな可能性が脳裏に浮かぶ。

「もしかして・・・俺の頭がおかしくなったんじゃね？」

考えたくはない・・・しかし可能性は捨てきれない。

あ・・・もしかして今から黄色い救急車（都市伝説）が迎えにくるんじゃね？

（精神病院ってパソコン使えんのかなぁ・・・）

（食事のメニューが嫌いなもんばっかりだったらどうしよう。）

（かわいい看護婦さんとかいねぇかな・・・）

そんなどうでもいいことを考えていると、「トントン」と襖が他叩かれる音がする。

襖の向こうにいる人から声がかけられる。

「主様起きられましたでしょうか？入ってもよろしいですか？」

「あ・・・はいどうぞ。」

反射的に答えてしまった後に誠也は思う。

（・・・すごく綺麗な声だなぁ～っていうか主様ってなんだろ？なんかこの家のしきたりとかなのかな？）

「失礼いたします。」

襖が開く。

「お加減はいかがでございますか？主様。」

入ってきたのは年の頃にして１３～１５歳くらいの少女でした。し

かも昨日眼が合った白無垢姿の少女。
（あぁ今日は・・・普通の着物すがたなんだなぁ～。）
（あれそうするとこの人が俺を助けてくれた人なのかな？間違っても看護婦さんってわけじゃないよね？）
（髪の毛の色が銀髪なのは地毛なのかな？すごく綺麗だけど）
（綺麗な赤い瞳だなぁ～頭の上についてる耳もすごくキュートだ）
（あれ？今俺なんか変なこと考えなかった～なんだろう？）

「あのぉ？ご主人様？もしかしてまだお加減がよろしくないのでしょうか？」
誠也が考え事をしている間に近くに寄ってきて心配そうに顔を覗き込んでくる美少女。

「いえぇ！？もう完全にだいじょうぶですぅ！！」
考え事をしたため少女が近づいていることに気づいていなかったから、慌てて返事をしたため声が裏返って変な声が出た。

死にたい・・・

「それはよろしゅうございました。お腹が空かれていることでしょう？今からご飯をご用意いたしますね。」
そういって振り向き部屋を出て行こうとする少女。

「！！！？？？？」
その少女後ろ姿をみて誠也はきづいてしまった。違和感の正体に・・・

「狐耳にしっぽ！？？」

そうその少女の頭にはピーンっとはった耳。お尻の付け根の辺りからは2本のもふもふとした銀色の尻尾が生えていた。
その声にが聞こえたのか少女が上半身だけ振り返りながら言った。

「妖狐族ですので。」
その顔には年に似合わない妖艶な笑みが浮かんでいた。

混乱そして会合（後書き）

尻尾が2本なのには意味があります。

混乱そして会合２（前書き）

見事に話が進まない・・・

混乱そして会合2

妖狐族と名乗った少女がでていってから、誠也はいまだに布団から上半身を起きあがらせた状態のまま、混乱していた。

（と、とりあえず俺を助けてくれたであろう、あの少女の事を整理してみるか。）

金色の頭を右手で掻きながら誠也は考える。

1．中学生くらいの着物姿の美少女

2．狐耳に2本の尻尾

3．銀髪・赤い瞳

4．俺の事を『主様』と呼ぶ。

5．狐の行列に籠で運ばれていた。

（特徴としてはこんなもんか。）

5つほどの情報を頭に思い浮かべ誠也は考えを巡らせる。

混乱する頭で考える。

（1．美少女についてはとくに問題はないよな。日本人だし着物をきる習慣の家だったあるだろ。）

（2．狐耳に2本の尻尾か・・・これはなんだろう？そういえば…数年前になんか動物の尻尾型のアクセサリーが流行ったような気が

する。
狐耳にしても、都内の某電気街では猫耳とかが流行ってるっと聞いたことがあるような。つまりは作り物か？）
（3．銀髪かぁ～最初俺が地毛で金色だから納得したけど、普通に考えたら染めてるって考えるのが自然か？赤い瞳に関してはカラーコンタクトかなにかだろう。）
（4．俺が『主様』ねぇ…うん。ねぇな。呼ばれる理由がない。少なくともあの少女とは初対面だしなぁ。なんか懐かしいような感じはしたけど…たぶん気のせいだろう。
この家のしきたりか又は、あの子の趣味の問題だろうな。）
（5．狐の行列と籠・・・きっと俺の見た夢だな。それしかない。）
そして考えた末に誠也は一つの回答に導きだす。
「妖狐族とも言ってたけど…」
（まさか・・・いやこれはあれか・・・噂に聞く、まさか実在するとは・・・年もたぶん丁度そのくらいだし、それしか考えられないよな。」
誠也の顔には驚きそして戸惑いの表情が浮かんでいた。
そしてその回答が頭の中で確信にかわったとき、誠也はぽつりと呟いた。
「・・・厨二病患者。」
誠也はすごく残念そうに顔を歪ませる。
（あんなに可愛いのになぁ…まさか現代社会の闇があんなかわいい

子まで侵略しているとは・・・この国は大丈夫なのか？）

そこまで考えてふととあることに気付く。

「えっと・・・俺もしかして痛い子に助けられちゃった？」

（やべぇ・・・どうしよう…あのまま山で寝てたら多分おれは風邪とかひいてたよな？もしかしたらもう秋だし昼は暖かかったとはいえ一歩間違えば死んでた可能性も・・・

もしかして命の恩人になるんじゃね？もしかして話を合わせたほうがいいのか？）

誠也が状況を整理していると不意に、

『トントン』

再度襖が叩かれる。

「主様、失礼いたします。」

そういうと徐々に襖が開いて行く。襖が開ききると少女は正座姿のまま三つ指をつき、

「ご食事のご用意ができましたのでお迎えにあがりました。」

そういってから少女は顔を上げる、やはり先ほどの狐耳の少女だった。

誠也はその姿をみて立ち上がると思わず、

「う・・うむ。苦しゅうない案内するがよいでごじゃる。」

その反応に少女はクスッと笑顔を見えると立ち上がり、

「では主様はまだこの屋敷にお詳しくないとおもいますので恐縮ながら私がご案内いたしますので、ついてきてくださいませ。」
そういうと少女は誠也が歩きだすのを見届けると後ろを向きになり、優雅に歩きを進める。

先を行く少女の尻尾を眺め誠也は一人ひとり思いを馳せる。

（さすがに…『う・・うむ。苦しゅうない案内するがよいでごじゃる。』はねぇだろ・・・どこの似非な公家だよ…）
誠也は若干うつむきながら先に歩く少女についていくのだった。

混乱そして会合２（後書き）

ノリで書いてみたけどあんまり文才はないな・・・

こんな中途半端な作品を読んで下さる皆様に心より感謝を申し上げます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1660ba/

狐付き

2012年1月6日00時49分発行